

観測部月報

★

東亞天文協會

★ 流星課だより (101)

課長 小 楳 孝 二 郎

四月には琴座流星群が見られる。本年は極大の頃が満月に當る爲、観測に不適當であるが、著名な流星群であるから是非注意されたい。輻射點は極大たる22~23日の頃では $\alpha=274^\circ$, $\delta=+33^\circ$ であるが、出現期間中、東方へ移動をする。又、此の月には、一ヶ月を通じて屢々乙女座($\alpha=210^\circ$ $\delta=-10^\circ$)から放射する火球がある。月末には龍座 δ 流星群($\alpha=291^\circ$ $\delta=+59^\circ$)が豫想される。猶ほ月末から翌五月にかけて水瓶座 η 流星群が活動する。

× × × × ×

本年初頭の四分儀流星群は、天候に禍されて、充分なる成績を挙げ得なかつた。吉井、川人の兩氏及筆者の結果を下を示す。

Date	Begins	Ends	Total	Meteors	Quadrantids	F.	Observer	Remarks
3日	5:30	6:00	90+	3+	0+	0.5	吉井	Counted
4	5:44	6:04	20	11	6	0.5	〃	〃
4	3:20	4:20	60	5	2	0.3	川人	
6	4:18	4:58	40	8	1?	0.6	小楳	

吉井氏の4日朝に於ける同流星群の一時間平均数(修正値)は36個となる。

二月1~3日頃に出現を豫想されたハセル・岡林彗星に關聯する蛇遣ひ座流星群は、筆者のところでは、天氣惡の爲、全く観測不能であつた。

往年流星課の主要なメンバーとして多大の活躍をされた流野英之助氏は去一
月末に逝去された。何としても惜しい事である。観測は近年止めてゐられたが、
後輩の指導に随分骨を折られてゐた。(1940-2-4 記)

★ 太 陽 課 (1940年1月)

報告者 13名

今月は意外に報告者が少なかつた。阿部、南、大石3氏の御奮闘は良く可能
観測日をとらへ、阿部氏の如き無缺測である。又、今月より岡林氏を迎える。

正村、杵掛、阿部氏より各黒點の緯度報告、又、來田、堀田、阿部、津留諸
氏より大黒點の詳細スケッチの報告を受けた。編輯の都合により、1月分報告
より少々短くしますが、何とぞ御諒承下さい。

黑點相對數報告 (1940年1月)

觀測者 (觀測地)	坂上 務 (福岡市大名町)	津留 繁雄 (熊本市本莊町)	谷口 馨康 (神戸市葦合區)	岡林 滋樹 (倉敷天文臺)	來田 晃 (大阪市大正區)	南 時生 (大阪市明星商業)	木邊 成廣 (滋賀縣中里村)	正村 一忠 (岐阜市溝旗町)	山田 達雄 (愛知縣大山町)	大石 辰次 (靜岡縣吉永村)	沓掛 七二 (長野縣青木村)	堀田 泰生 (橫濱市寺尾町)	阿部 正明 (東京市池袋)	片山 八郎 (東京市立一中)	小石久太郎 (東京市神田)
口徑 mm	42	130	40	75	50	25	75	25	69	55	102	20	28	100	58
倍率	64	45	50	40	53	54	60	48	44	64	75	50	45	32	64
方法	投	投	直	直	直	直	直	直	直投	直	直投	直投	投	投	直
1	68		11	33	22	22	29	旅		37	22	缺	22	23	
2	56		45	23	38	38	29	35		24	24	缺	47	缺	
3	47		139	58	75	49	49	缺		56	62	71	80	47	
4	24		249	68	93	67	67	缺		64	缺	82	82	55	
5	120		旅	65	118	65	65	缺		66	95	97	84	54	
6	79		237	58	80	65	22	22		34	43	94	48	50	
7	56		231	缺	62	50	50	50		26	55	70	35	55	
8	51		89	缺	45	53	53	雪		19	雪	缺	46	51	
9	旅		88	41	34	31	缺	雪		42	雪	59	51	雪	
10	雪		缺	27	31	31	缺	雪		26	雪	缺	42	56	
11	雪		缺	26	38	45	12	12		37	39	缺	38	40	
12	雨		雪	缺	32	缺	27	27		54	雪	雪	41	31	
13	82		81	21	39	80	72	56		54	17	雪	61	缺	
14	78		99	21	39	80	80	雪		17	41	雪	58	62	
15	雪		缺	56	缺	80	46	46		37	雪	雪	59	缺	
16	雪		77	61	60	缺	40	40		24	53	雪	53	50	
17	雪		64	64	92	92	47	47		46	59	雪	53	101	
18	雪		51	51	71	55	雪	雪		48	雪	雪	54	缺	
19	雪		71	71	106	121	雪	雪		68	雪	雪	100	116	
20	雪		139	102	59	99	111	55		75	缺	69	97	缺	
21	雪		60	病	26	71	91	缺		36	缺	缺	57	雪	
22	雪		33	33	38	56	缺	50		28	缺	38	65	101	
23	雪		46	34	42	缺	缺	缺		15	雪	雪	39	129	
24	雪		34	29	雪	雪	46	46		26	27	雪	雪	雪	
25	雪	25	缺	27	53	53	47	47		40	49	雪	47	70	
26	雪	雪	雪	46	30	45	65	雪		46	雪	47	49	病	
27	雪	38	雪	30	39	39	病	病		38	雪	缺	35	雪	
28	雪	93	病	43	12	12	雪	雪		34	58	雪	38	雪	
29	雪	61	缺	缺	52	52	62	62		43	59	雪	59	60	
30	雪		17	14	17	28	16	14		26	15	8	31	17	
31	雪		17	14	17	28	16	14		26	15	8	31	17	
觀測 日數	9	3	17	14	17	28	16	14		26	15	8	31	17	
一日 平均	70		105	52	43	57	67	43		40	45		55	64	
前月 平均	60	43	62	—	46	45	63	36	54	35	47	—	54	67	

尙ほ報告は急報の通り、廣島縣沼隈郡瀬戸村 黃道光觀測所内東亞天文協會太陽課宛て、翌月5日までに當着するすう御報告下さい。

★ 月面課だより (1)——Stevinus 山の色相變化 月面課長 伊達英太郎

本會に月面課が新設されて以來、荒木氏が月面の課長でしたが、ここ數年來、活動されませんでした。今度同氏が課長を辭任の結果、同じ遊星面をやつてゐるからと云ふ理由で適當な人の有ります迄と云ふ條件付きで、不肖が月面課々長の責任を當分の間繼承することとなりました。願はくば、會員諸先輩の御鞭撻を以て、就任期間中、無事課長としての仕事を遂行させて頂き度いと、豫め願つておきます。

Stevinus 山の變化

月面觀測につき、一通りの要領を記し度いと思つてゐますが、原稿メ切後の事として、時間的に、又、スペースに、餘裕が無く、この點に關しては次號に詳述するとして、先づ今回、京都府立一中天文氣象同好會で偶然爲された Stevinus 山の色相變化の觀測について記し度いと思ひます。

いづれ次の機會に詳述しますが、月面火口中には、これ迄の諸外國の觀測家によつて色相と形狀に變化を來すものがある事は、ブレン第 289 號に、かつて發表されましたが、その中 Stevinus 山(月面西南部、Petavius 山の南東方)の火口内部が、日出前赤く輝く……と云ふ色相の變化を、上記京都一中天文氣象同好會の會員の一人が、去る昭和14年11月14日17時40分に見出され、同會で確認され、同會遊星面課長 樋上敏一氏(今回の火星觀測を遂行せる本會々員)より報告がありました。報告書によると……

14年11月14日17時40分頃(月齡3日)、天文氣象同好會會員永井君より“月面豐饒の海の南方に當る一火口が、その近接の一火口に比し若干赤味を帯びてゐる様に思ふ故、觀測を望む”との電話あり、直ちに觀測せんとせしも、西天一面に掩はれ、月の觀測不能の爲、當夜は不能。翌夜これを確認、翌々夜觀測したが、此の時には、すでに當該火口は隣接火口と色相上變化は認められなかつたとの報告で、これを詳述すると……

當夜 Seeing は 6~8 で、永井君のは使用器械は 10 糎反射經緯臺、圖示によると、赤味を帯びたと云ふのは Stevinus 火口で、比較したのは Snellius 火口と確認し、中澤、坂内の兩君にも通知した。

15日夜、永井、坂内、中澤の三君よりの通知によると雲の爲不能、小生の處は雲はあつたが、Seeing は良く(平均7)、12糎反射で、自製月面詳細圖と引合はせつゝ觀測した處、Stevinus の火口内部は、Snellius のそれに比して確かに薄い乍らも赤銅色を帯びてゐるのを確認(15日19時05分~19時15分)した。

そして、16日夜には最早や Stevinus は Snellius 同様の色相に歸つてゐるのを認めた。

以上が樋上氏よりの報告で、これによると、Stevinus 山の色相變化は、同山の夜明け後、少時して觀測されたもので、上記「夜明け前に赤味を呈す」と云ふ條件から推すと、今少し早く、即ち Stevinus 山頂に太陽光が當り初めた頃から觀測すれば、より以上顯著な變色が見られるかも知れないと思はれる。この様な興味多い、しかも重要な觀測が本邦アマチュア、しかも若い學徒に於て爲された事は非常に愉快な事で、これを機に、月面觀測が復活すれば、筆者としてこれ以上の喜びはない。

因みに、月面の、かなり精しい圖は、“天界”第161號と第162號とに掲げられてある。殊に、Stevinus 山は、天界161號の第430頁にある“月の西南部”の、まるいフチから11ミリばかりの Patavius 山の近くで、(圖に名は現はれてゐないが、)山の右上10ミリばかりの所の噴火口が Snellius 山、それから更に6ミリばかり右上の所(Petavius 山からは15ミリの所)にあるのが Stevinus である。この Stevinus 山からは、四方八方へ放射線も出てゐる。

月面課更生の第一步に、かく輝かしい成果が擧げられた事を慶ぶと共に、より一層の活動を祈つてやまない。(15—2—7 記)

★ 豫報課より。 少々おそいけれど、次頁に本年(1940年)中の遊星の離隔一覽圖を掲げる。之れは、ながい以前から“天文年鑑”に掲げたものであつて、初めての人には少々解りにくいかも知れないが、慣れて見れば、極めて重寶なものである。圖の構造は、各遊星が、毎月毎日、太陽の右や左に幾らほど離れてゐるかを現はすもので、太陽からの離隔は時間で表はし、左右に目盛つてある。又、月日は15ケ日毎にして、上下に目盛つてある。尙ほ、時刻の目盛りは、太陽が毎日ほぼ正午(12時)に南中することを考慮に置いて、上から下へ、圖をタテに二等分する點線を太陽とし、各々の遊星については、例へば

太陽よりも2時間遅れて南中する場合には、14時で之れを示し

〃 5時間早く 南中する 〃 7時で之れを示す

やうにしてある。

各遊星は一年中に移動して、太陽の左となつたり、右になつたりするから、毎日の遊星の位置を表はす線は可なり複雑なカーヴを描いてゐる。最も甚だしく蛇行するのは水星で、年内に3回づつも宵の星となつたり、曉の星となつたりする。對衝や會合や、極大離角や、其の他いろいろの現象を本誌天象欄と引き比べながら見ると、容易に了解できる。

